
遅い目覚め

勝目博

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遅い目覚め

【Nコード】

N9347D

【作者名】

勝目博

【あらすじ】

離婚で傷心した私に、母が渡した一通の手紙。そこには、信じられない事実が書かれてあった。ファンタジーコメディを、軽いタッチ……。

第1話

今の暮らしは間違っている。何か足りない。そう思う人間は星の数ほどいるはずだ。

充実感も幸福感も味わえず、無駄な日々を送っているのでは、思っているだろう。

私もその一人だった。満ち足りた気持ちになれずにいたのだ。楽しいことをしているつもりでも、その後には虚しい世界が待ち構えていた。

どんな職業も長続きせず、転職の繰り返しだった。

それを結婚生活に失敗した理由にするつもりはないが、常に何かを求めていた。

それが何かは当時の私には、見当も付かないことだったのはまぎれもない事実。

そうあの日まで……。

あれは、私が結婚に失敗して、実家に帰省した日の夜だった。

お袋が一通の手紙？らしきものを渡してくれた。長い間忘れていたらしい。

封は切られていなかったが、宛名は明らかに私だった。

古ぼけた封筒を開いたが、紙面の文字は解読不可能だった。

ローマ字でもなければハングル文字でもない。

ましてや漢字ともひらがなとも、かなりかけ離れていた。要は、読めなかったのだ。

「お前が生まれた日に、送られてきたのよ。なぜか知らないけど捨てられなくて……」

お袋は不思議なものを見るように、その手紙を見つめていた。

封筒の消印は、私が生まれた日だった。

しかも、生まれた日に私の宛名が既に書かれているとは、それだけ

でも不思議なことだった。

お袋は渡し忘れていた事を、弁解にも近い言葉で繕っていた。なぜか、渡すのが怖かったらしい。私でも不気味に思うだろう。

封筒は気にはなったが、正直に言えば今の私にはどうでもよかった。読めない手紙よりも、明日からの自分の事で頭はいっぱいだったのだ。

翌日、自分のアパートに戻ったが、仕事はどうでもよかった。

寒いアパートには自分ひとり。自分の食いぶちだけならば、あくせく働く必要もなかった。

自慢ではないが、こんな時に相談できる友人さえいなかった。

冷蔵庫から冷えたビールを取り出し、明るい時間から飲み始めた。ベッドに腰を掛けて足を放り出し、真っ黒なテレビ画面を見ていると、

ふと、昨夜の封筒を思い出した。バッグをまさぐり、封筒を開いてみた。

逆さにしてもひっくり返しても、差出人さえ分からない。

封筒の裏面を見たが、ここにも何も記されてはいない。だが、何かがちがうように感じた。

封筒とは違う重量感が感じられたのだ。

静かに振ってみると、微かな重みが手に伝わってきたのだ。

丹念に調べてみると、小さなコイン？らしきものが封筒から滑り落ちた。

床に落ちたコインらしきものを拾い上げたとき、いきなり私の頭に稲妻が駆け巡った。

私は慌ててコインらしきものを投げ捨てたが、台所まで転がったコインらしきものは、

なぜか私を呼んでいるように思えて仕方なかった。

恐る恐るコインらしきものを拾い上げたが、今度は先ほどのようなショックは受けなかった。

その代わりにすごく懐かしいものを感じた。

それは暖かく、私を包み込むような愛さえ感じられた。心が幸せに満たされた高揚感を抱き、コインらしきものを胸にベッドに腰を下ろした。

ベッドに腰を掛けても、時計の針が一周しても、それでも幸福感は消えなかった。

私の両親も私が幼い頃に離婚していた。

お袋は早々に再婚し、私は義父との生活を余儀なくされた。

お袋とて女である。愛情は子供よりも新しい旦那に注がれ、私は我慢を強要させられた。

私が早くに結婚したのもそれが理由だったかも知れない。

自分の居場所がほしかったのかも……。今、その母の愛情に近いものが私を包み込んでいた。

その時何故、手紙に手を伸ばしたのかは分からない。

しかし、手紙を手にした時、更なる衝撃が私を襲ってきた。

読める。ついさっきまで、意味不明だった手紙の文字が、はっきりと意味を成した形で、

私の目に飛び込んできた。そこにはこう書かれていた。

「息子よ。お前がどんな暮らしをしているのか、今は知る由もない。願わくは、思春期ごろにはこの手紙を見てほしい。

おまえにはやらなくてはいけないことが山とある。

詳しくはその情報カプセルに保存しておく。何か映せるものを利用すればよい。

これだけは言うておく、私たちはお前を愛している。一緒に居られないのが残念だ」

正直私は戸惑った。

手紙の差出人は本当の両親なのか？文面からはそう読み取れる。

では、昨夜会ったお袋は、母ではない？

なぜ急に意味不明だった文字が読めたのか？情報カプセルとはどれか？

私の頭は完全に混乱していた。

その時は、何時間も意識もうろうつとしていた。

次から次へと考えが浮かぶのだが、何一つ答えを見出せないのだ。辺りが暗くなった頃に、私は我に返った。

暗がりの中、手探りでベッド脇のサイドランプのスイッチを入れた。壁の時計は八時を回ったところだった。

携帯からお袋に電話を掛けてみた。問いただすつもりは毛頭ない。

義父は既に亡くなっている。遠慮はいらない。

第2話

「あ、お袋？昨日はご馳走さん」簡単な挨拶だ。

「どうしたの」

お袋の返事。これもいたって簡単だった。

「おかしな質問するけど、ちゃんと答えて」

私の質問に対するお袋の答えは、ある意味不思議な答えだった。

私は私の生まれた状況を聞いたのだ。

「あんたは七ヶ月でうまれたの。でも未熟児ではなかったわ。三千六百グラムあったもの。」

お腹にいるときはよく動く赤ちゃんだった。でも六ヶ月を過ぎた頃に、急に大きくなったの。

医者も驚いていたけど、結局は私の計算間違いだと言っていたわ」

お袋は何度も計算間違いはしなかった、と繰り返していた。

しかし、計算間違いではないとしたら、六ヶ月の胎児の私に、何かが起こったことになる。

そう思わずにはいられなかった。しかし、お袋が腹を痛めたことは紛れもない事実だった。

では、この手紙の主は？その内容は？私はコインを手持った。

その情報カプセルとは、これ以外に考えつかない。

同封されていたのは、このコイン？のほかには何もなかったのだ。

試しに、真っ暗なテレビ画面に近づけてみた。しかし、何の反応もなかった。

そのコインをじっくり観察してみたが、何も見つからなかった。のっぺりとした銀色の表面には、スイッチらしき突起もないし、丸い側面にも切れ目一つなかった。そして、見たこともないような金属にも思えた。

だが、こうやって持っているだけでも、幸福感は失われなかった。単なる悪戯なのか、事実なのか、それさえ分からなくなっていた。

もう一度紙面を読み返したが、内容に変化はなかった。そこで一つの疑問が持ち上がった。

何故、急に読めたのか？このコインが原因なのか？

だとしたなら、コインを持たずに読めるのか？

幸福感を投げ捨てることに躊躇しながらも、コインをテーブルに置いてから、

紙面に眼を向けた。

「……」

思ったとおり、以前の意味不明な文字に戻っていた。

その時、これが情報カプセルだと、私は確信を持った。

ならば、どうしても内容を知らなければと思ったのだ。

もう一度、そのコインをテレビに近づけた。やはりなんの反応もない。

今度は電源を入れてから近づけた。画面は無情にもニュースキャスターを写し続けていた。

落胆しながらも必死に考え、今度は空きチャンネルにあわせてから、コインを近づけてみた。

すると、画面の砂嵐が徐々に収まり、若い女性の姿が映り始めた。

「これを見ているということは、そろそろ大人の仲間入りね」

女性は優しく語り始めたが、そんな時代は当の昔に過ぎてしまったと、私は内心想った。

「貴方も自分の変化に気が付いていると思うわ」

どんな変化があったのか、今では何一つ覚えていなかった。

変化と呼べる唯一の記憶は声変わり程度であったが、その過程は既に記憶から失われていた。

急に変化したのか？徐々になのか……。

もしかすると、友達より腕力はあったかもしれないが、はつきりとは覚えていなかった。

「それは、貴方が地球人では無いからよ」

私は目の玉が飛び出る思いだった。

「私たちの星は、破滅の一途をたどっているの、消滅までもう時間が無いの。」

そこで貴方だけでも助かるように、はるか遠くの地球に送ったの。何故かは、私たちと地球人は、外見上では、見分けがつかないからよ」

確かに画面の女性は魅力的な人間の女性に見える。

彼女の言うとおりならば、画面の女性は異星人であり、私も異星人ということになる。

不謹慎だが、私は笑ってしまった。どう見ても、普通の地球人と変わりはないかった。

まるでどこかの映画そっくりな話だ。いや、案外その映画は、的を得ていたのかも知れない。

笑いを必死に抑え、私は画面の続きに見入った。

「でも、地球とは大きな違いがあるの。まず重力が地球のほうが軽いわ。パワーも人間よりも優れているの。もちろん知能もよ。でも、これには訓練が必要なのも忘れないで。

人間同様に身体を鍛えることが必要よ。そのためにも、思春期には始めなくてはいけないの」

ちよつと待てよ。私は思わず叫びそうになった。もう三十を超えているよ、と。

その後の映像では、いかにして空を飛ぶか、力の出し方はどのようなするのか、

あらゆる能力について、事細かに説明され、その習得方法が収録されていた。

全てを見終わったのは、三十六時間後だった。

不思議と疲れてはいないし、内容も全て頭に入っていた。

今は画面も砂嵐に戻っていたが、私は動きもせずにじっと、自分の手を見つめた。

やがて、思い切りテーブルに手刀割を振り下ろした。が、テーブルは無傷で私を笑っていた。

手は非常に痛かった。

痺れる手を摩りながら、習得方法を思い出していたが、なにぶんにももう三十を越えている。

どれだけ習得できるのか、自分でははかり知れなかった。

しかし、本当なのか？

半信半疑ではあるが、読めない文字が読めたり、空きチャンネルが映ったりと、

嘘や冗談、ましてや悪戯とも思えず、能力の一つ一つの習得に向け、必死の訓練が始まった。

しかし、もう三十を……。

そんなことは言っていられない。何度、途中で投げ出そうと思ったか知れない。

しかし、不思議と気持ちは充実していたのだ。

そして、無理だと思っても、訓練を止めることは無かった。

第3話

それから二年が過ぎようとした頃、変化が起きた。

まず、視力が極端に回復した。はるか遠くまで見渡せるようになった。

それだけでは、ブッシュマンと変わりはない。

身体も不思議なほど軽く、今にも空を飛びそうだった。

が、その時点では、単なるジャンプしか出来なかった。

厳密に言えば、バスケットボール選手にも追いつけない程度だった。この時ほど二人？の母親を恨んだことは無かった。地球に送るほどの技術を持ちながら、

何故、思春期に手紙を見る段取りをつけなかったのか？何故、お袋は渡しそびれたのか？

考えれば考えるほどむかついてきた。そんな時、苦しい時はあのコインをそっと胸に抱いた。

しかし間もなく四十になろうとした頃、劇的な変化が私に訪れた。空を飛べるようになったのだ。

これで、アメリカンコミックのスーーマンになれると確信した。ところが、その後どう頑張っても空高く飛べるようにはなれなかった。

せいぜい地上五十センチがよいところで、スピードときたら歩くほうがはるかに早かった。

『始めるのが遅すぎた』 またも二人？の母を恨んだ。とてもヒーローにはなれそうも無い。

スーーマンの夢がもろくもくずれさった。気持ちは湖のどん底で苦しみもがいていた。

子供の頃は、存在しないウトラマンに失望し、今はなりそこないの自分に失望した。

異星人だからといって、スーーマンのようなヒーローになる必要

はまったくない。

しかし、特殊な能力を身に付ければ、使わないのはおかしい。特殊であればあるほど使うはずだ。

しかし、走るのが速いといって、陸上選手にはならないし、空を飛べるからといって、

パラシュートも無しに、スカイダイビングはしないだろう。要は、皆から不審がられ、注目を集めすぎてしまうからだ。

しかも、使い方は、膳と悪とはつきりと分かれる。私は悪人ではない。

善の考え、ヒーローの考えしか浮かばなかったのである。

それでも、力だけは少しずつ付いてきた様に思えた。

そんな私を、試すような出来事があったのは、ついさっきの話である。

よりによって私が行った銀行が、これまたよりによって私がいるときに、

強盗に襲われたのだ。犯人は三人組。そして拳銃で武装していた。正規の銃か、改造銃かは分からない。

しかし、撃たれた時、死ぬほど痛かったのは、紛れもない事実だった。

その時の私は、これも訓練の一部だと思い、犯人の前に躍り出た。今では後悔しているが、ヒーローになれるかの瀬戸際に思えた。

見てみぬ振りをすれば、一生ヒーローにはなれないと思い込んだのだ。

もちろん犯人は驚いた。

銃を持った男に、素手で立ち向かう馬鹿いるのかと、面食らった様子だった。

犯人の一人は銃を向けたが、私のほうが早かった。

左の手刀で銃を叩き落し、右手で喉輪を決め、左足で蹴り上げた。しかし、その足蹴りは、腹に入れるつもりが、股間へと命中した。もう使い物にはならないだろう。刑務所では女役に決定だな。

そんな悠長な考えをしている自分に驚いた。

これで一人は見事やつつけた。ところが、異変に気づいた一人に、背後から撃たれた。

焼け付くような衝撃が胸を貫通し、暖かい液体が流れるのを感じた。だが、私は倒れなかった。そして、その犯人も見事やつつけた。信じられない速さでその男に近づき、顔面パンチ一発で倒した。

金庫室に行っていた最後の犯人が戻ってきたとき、今度は右腹を撃たれた。

これも、激痛が走ったが、まとも倒れずに済んだ。

しかも、私の右パンチは怒りのせいもあり、犯人を十メートルも吹き飛ばす威力を発揮した。

犯人が起き上がらないのを確認した後、気が付いたのは病院のベッドだった。

そして今、看護師が点滴を代えているが、意識の取り戻した私に、笑顔で頷いた。

「気が付きましたね」

「どうしてここに？」

私には記憶が無かった。

「銀行の人が連れてきたのよ。素晴らしい活躍だったって。みんなに言ってこなくちゃ」

看護師は病室を足早に出て行った。数分後、医師やら、看護師やらが何人も訪れてきた。

「奇跡的ですね」

担当医が言うには、銃弾は巧みに内臓を避けて、貫通したため無事だったと。

見せられたレントゲン写真には、銃弾の貫通路が映し出されていたが、

内出血も無い元気な内臓も写していた。

「銀行の方と警察官が来ていますが、会いますか？」

先ほどの看護師が私に尋ねた。

「私は捕まるのですか？」

警察と聞いて私は驚いた。暴行罪、そんな言葉が頭を横切った。

「とんでもない。貴方はヒーローよ。お礼が言いたいみたい」

看護師は何故か潤んだような眼で、私を見ていた。

しかし、そんな視線よりも、私は「ヒーロー」という言葉が耳から離れなかった。

「構いません」

私はそう答えた。

やがて、私服の警官、銀行の支店長、マスコミの取材陣などが、病室になだれ込んできた。

「とにかくお礼を言わせてください」

最初に口火を切ったのは、銀行の支店長だった。支店長は握手を求め、私はそれに応えた。

その場面で一斉にカメラのフラッシュがたかれた。その後は、マスコミの取材攻めにあった。

お怪我は？から始まり、何故、銀行にいたのかまで。

何故、銀行にいたかって？貯金を下ろしたり、預けたり、公共料金を払ったり、

普通の人と同じ事をしにいただけだ。そんな質問が馬鹿らしく思えた。

警察は元気になったら事情聴取を行いたいと申し出た。顔は笑っていたが、容疑者並みだ。

私は思った。ヒーローと、スーパーヒーローの違いはここだと。

ウル ラマンなど、取材も受けたことは無い。

建物を壊し、街を破壊してもお咎めは無い。直ぐに飛び去ってしまうからだ。

スーパーマンも、スパイーマンも同じだ。直ぐに居なくなる。

警察にも居場所は分らない。

普段の生活では本性を隠しているからだと思っただ。

これからは病院に運び込まれるようなドジは踏まないよう、硬く自

分に誓った。

怪我は不思議とあつという間に完治した。医師の驚きを無視して、私は半ば強行に退院した。

細かく調べられるのも問題だったからだ。私の星の母？が言っていたのは、

外見では変わらないとだけで、詳しく調べられたら何が出てくるのか分かったものではなかった。

しかし、問題は残った。帰りのタクシー運転手にも握手を求められ、帰り着いたアパートは報道陣で溢れ返っていた。しっかりと調べはついているのだ。

私は仕方無しにそのまま都内のホテルに向かった。

運転手は、他言しませんと、気の毒がっていたが、裏切る可能性は十分に残っていた。

タクシーが居なくなるのを確認してから、私は徒歩で別のホテルを探し始めた。

なるべく顔を見られないようにと気をつけていたが、妙に視線を感じた。

そう感じたただけかも知れないが……。

第4話

ヒーローとは疲れるものだと思いながらも、充実感もあり、最高の気分だった。

しかし、やたらと通行人の声が響いてくる。耳元近くで話しているみたいだ。

振り向いたが、そこには誰も居ない。おかしいなと、思いながらも歩いていると、

突然、助けを求める声が響いた。

慌てて辺りを見回したが、それらしき人物も、犯罪らしき行いも見出来なかった。

耳を澄ますと、はっきりと助けを呼ぶ声は聞こえた。女性の声である。

これも能力の一つだと気がついたが、どうすることも出来なかった。病院帰りのため、パジャマや下着の入ったバッグを持ち、顔を隠して歩くような男に、

人助けなどする余裕は無かった。

ヒーローに時と場所は無関係だが、今の私には大いに関係があった。それこそ犯罪は至る所で起き、時間の制約も無かった。

早朝割引の犯罪など、聞いた試しもないし、深夜割り増しの犯罪も皆無だ。

そこで私は考えた。

仮に人命危機の犯罪が同時起こった場合、スー　ーマンみたいに早く移動出来ない理由で、

どちらかを選ばなくてはいけない。

しかも、その判断基準は、聞こえてくる声だけが頼りになる。

それが、三箇所、いや四箇所だったら……。私は考えるのを止めた。答えが出ないことに悩んでも仕方ない。

よって、今聞こえる声も、無視するより仕方なかった。

それほど危機感に陥った悲鳴にも聞こえなかったのだ。

今はホテルを探すのが先決だと、私は足を速めた。

ちよつと早く歩いたつもりだったが、走っているようだった。

おおおお、と思ったが、カール・ルイスには負けると分かった。

耳には相変わらず声が聞こえた。

こちらの意志とは関係なく、あらゆる声が耳にこだました。

その中には、情事の声まで混ざり、思わず、にやけてしまった。変態的な情事だ。

止めようと思っても、つい、その手の声に集中してしまう。地球人である時間が長すぎた。

なんて人間的だろう。自己弁護でしかないのは、十分理解している。その内、一軒のホテルを見つけ、急いで飛び込んだ。幸い部屋は空いていた。

しかし休日前夜で、料金は馬鹿高だった。幾らかの謝礼は銀行からもらったが、

こんな生活をしていたら、直ぐに底を尽きそうだった。

部屋に入って湯船に湯を落とし、これからの生活について考えた。

第一に生活費の問題だ。人助けに費やす時間が多ければ、仕事も出来ない。

仕事が出来なければ、食うに困る。

やはり、人助けをする時間帯も、しっかりと決めなくてはいけないようだ。

昼の仕事をするとして、人助けの時間は、夜の七時から十一時。そんなところだろう。

夜更かしすれば、翌日の仕事に響きそうだ。それと、住む所。今のアパートはもう住めそうには無い。

しばらくは、マスコミが待ち構えていそうだし、隣近所にも迷惑がかかる。

銀行からの謝礼を使いきる前に、引っ越す必要がありそうだ。

明日にでも不動産屋を回ってみることにした。

そして重大な問題。これを怠ると、仕事も新居も失いかねない。それはヒーロー時の変装だ。

二度とばれないような変装をしないと、また引越す羽目になる。ホテルのメモ帳にいろいろ書いてみたが、私には絵心が無い。そんな能力は、実の母も言っていなかった。

仮にいい案が浮かんでも、誰が作る？困った。正直困った。裁縫の能力もないのだ。

何か市販のマスクでも被るか……。『おっと、風呂がいっぱいになった。また後で考えよう』

風呂上りに、廊下の自販機で買ったビールを飲んだ。うまい。

この感覚も地球人での生活が長すぎたためだと思った。そこでふと気がついた。

故郷の星にもビールはあるのかな、と。私は大きく首を振った。

待てよ、消滅の危機が迫っていると言っていたな。もう消滅したのか？

はるか宇宙の出来事など、私に分かるはずも無かった。私どころか、新聞にも載りはしない。

母とは言え魅力的な良い女だった。

既に消滅してしまっているのならば、もったいないな、とも思った。画面の女性は、自分よりも年下で美形だったからだ。どうしても母とは思えなかった。

そこでまた疑問に突き当たった。寿命は？人間と同じくらいなのか？今のところ心配はなさそうだが、ぱたりと死んでしまう可能性もあった。

この”死ぬ“というのも、当てはまるのかさえ疑問だった。例の情報カプセルには肝心なことが収められていなかった。またまた疑問が湧いてきた。

子供は？地球人とのハーフでも、能力は継承されるのか？別れた妻との間には2人の子供がいた。

もしも継承されるなら、一番上の子供はもうそろそろ二十歳だ。

「遅い！気がつくのが遅い！」

おっと、大きな声を出してしまった。酔ったかな？

風呂上りのビールは吸収がはやいから……。

二十歳ならば自分よりは有利だろうが、どこに住んでいるのか知らなかった。

このまま、地球人として生活してもらうしかなさそうだと、無理やり結論付けた。

相変わらず耳には様々な声が聞こえてくるが、集中しなければ、それほど気にはなくなってきた。

また助けを呼ぶ声が聞こえた。

しかし、今日は酔ってしまったし、マスクもまだ用意していない。諦めてもらうしかない。

「さあ、寝るか！」

私は布団を頭からかぶった。幸いにして酔いも手伝い、私はすぐに眠りについた。

第5話

翌日は、晴れ晴れとした気分で眼が覚めた。今日は忙しい。そう、しっかりと自分に言い聞かせた。

不動産屋を回って、マスクを手に入れ、仕事を探して……。眼のまわる忙しさだ。

まずは朝食を取らなければ、と私は近くの喫茶店に向かった。モーニングサービスは、休日でもやっていた。

トーストをかじりながら、またもや疑問が湧いてきた。

食事は同じなのか？もしかして、身体に合わないものを食べているのでは、

と心配になってきた。

しかし、故郷の星の食べ物を教えてもらっても、入手する手立ては無い。

地球の食べ物で我慢するしか、ないようだった。

「おいしく感じるのは問題ないか」

事実が分からない以上、どこかで結論を出す必要があった。

もしも結論を先延ばしにすれば、とことん迷う羽目になる。

こんな楽天的な考えは、地球人の特性か？

はたまた故郷の特性か？また迷う。迷うのも、地球人の特性で……。『やめた！』

今日は忙しい。再度、自分に言い聞かせ、喫茶店をあとにした。

新しいアパートといっても、仕事先から遠くては困る。

まずは仕事だな、と思い、職安に行くことにした。ところが、職安は休日で休みだった。

仕方無しにコンビニエンスストアで求人雑誌を買って、公園のベンチであらかた見たが、

年齢的にも、資格から言っても、いい仕事は無かった。

まず、残業は出来ない。残業すれば人助けの時間が減ってしまう。

きつちりと時間で終わる仕事。

なかなか無さそうだった。子育てパパやママの苦勞がよく分かる。その上、地方も困る。

それは都会のほうで断然犯罪は多いからだ。その分助けを求める人も多いはずだ。

『アーうるさい』

朝っぱらから助けを求める声が耳に響く。今日は忙しい。

『明日にしろよ!』

そう怒鳴りそうになって慌てて口を押さえた。しょうがない、休み明けに職安に行くか。

今日はアパートを探そう。そう思い、ベンチから立ち上がった。

求人雑誌はゴミ箱に放り投げた。

力を入れすぎたのか、ゴミ箱ごと五メートルほど吹っ飛んだ。

私は逃げるように公園から立ち去った。

気がつくのと、いつの間知らぬ街まで来ていた。

そして側の電柱の住宅表示を見て、私は驚いた。

あつという間に隣の県まで走っていたのだ。私を見た人は驚いただろうな。

くだらない疑問が湧いた。

しかし、着実に能力は伸びつつあった。この分ならば、ヒーローになれそうだった。

私はこの事実を大いに喜んだ。

高く飛べるかな？前回はどう頑張っても五十センチだったが、今日はいけそうだった気がした。

近くの公園を探し当て、人目が無いのを確認してから、私は飛んでみた。

意識を集中すると、ゆっくりだが、確実に宙に浮き出した。『いいぞ!』

自分で自分を応援したが、やはり五十センチでぴたりと止まった。

私は立っているからだと思い、宙に浮いたまま横になった。

スー マンの映画で見た、あの格好だ。

それでも高さは上がらなかった。前に進むのは問題が無い。速さは……。

『おお、前回より早く感じる、いい調子だ。そのまま、そのまま早く飛べ！』

しかし心で念じても無駄だった。速度も一向に速まる気配はなかった。

ふと視線を感じ振り返ると、中学生ぐらいの男の子が二人、咄然とした表情で見ていた。

「やあ」

つい口から出た言葉は、ありきたり過ぎた。

「うあー」

二人は一目散に逃げ出した。客観的に見ても、幽霊くらいにしか見えない。

冴えない服装で、歩く速度で宙に浮いていれば、誰でも逃げ出す。早くこの街を出たほうが良さそうだ。

私は立ち上がり、一目散で逃げ出した。走りながらも私は考えた。

何故、ヒーローなのに逃げてばかりなのか、と。『おつ、さっきの中学生が走っている』

一瞬で追い越したが、声をかけたら、『もつと驚くかな？』

くだらない悪戯のための能力ではない。私は自分を叱った。

そしてもと居た町まで戻り、不動産屋を探した。

謝礼と貯金の額を考えても、大した物件は借りられそうも無かった。出来れば、礼金一、敷金一、あたりが狙いどころだった。

庶民じみたヒーローだと、つくづく思った。もしも、思春期前に手紙を読んでいたら、

おそらく数々の能力はあつという間に会得しただろう。

そうすれば、学生時代からヒーローとして活躍でき、衣食住には困らなかった。

また知能も高いと言っていた為、就職にも困らなかったであろう。

そう考えると、二人の母を恨む心がまた疼き出した。

第6話

宿泊先ホテルのある町まで辿り着き、一軒の不動産屋を探し当てた。
「いらつしやい」

小さい店だが気立ての良さそうな親父が出てきた。

「アパートを探しているのですが」

「どのあたりで？」

親父は聞いたが、直ぐに答えは出せなかった。仕事も決まっていな
いからだった。

「うーん、安ければどこでもいいけど……」

そんな答えしか出来なかったが、気の良い親父は嫌な顔を見せずに
聞き返した。

普通はこのあたりで冷やかしかを、見抜くところだろうが、
私の場合は必至に見えたらしい。事実、急いでいたのだ。

「予算はどのくらい？」

「月に五万ぐらいで、出来れば礼金一、敷金一。そんな物件ありま
すか？」

「古くてもよければありますよ。場所は……、この近くだね」

親父はチラシの束から、一枚抜き取った。

チラシには、賃貸料月四万九千円、礼金一、敷金一。

と書かれていたが、トイレはあるものの、風呂は付いていなかった。
まさか人助で汗をかいた後、銭湯に通ってもいられない。

風呂上りのビールもお預けになりそうだ。

「風呂付はありませんか？」

私は尋ねた。

「ちよつと遠くなるけど、それでもよければありますよ」

二、三枚のチラシを抜き出した。その一枚を持って親父は言った。

「これは、お得ですよ。バス、トイレ別、月四万五千円。一DKで、
敷金、礼金一つずつ」

私は目を輝かし、チラシを受け取った。えーと、住所は……。おつ、千住か。

まあ下町とは言え都会だな。

築……昭和45年？かなり古そうだ……。しかし、贅沢は言っではられない。

「見ることは出来ますか？」

私は半信半疑で尋ねた。

「ちよつと待ってね」

親父は電話を引き寄せ、とあるところに掛け始めた。

「お宅の千住の物件……。そう四万五千円の……。そうそう……。見られます？」

うん、お客さんが来て……。はい、はい、……。よろしく」

親父は受話器を持ったまま私に尋ねた。

「見えるそうですけど、今から行きます？ここからだ、一時間位かかるけど」

「い、行きます」

私は速攻で答えた。少しでも早く部屋を見つけないと一心だった。

「じゃあ、駅に着いたら、この携帯に電話して。相手も一時間後に駅に行くから」

親父はそう言っ、相手の電話番号を渡してくれた。

それから二言ほど話してから、親父は電話を切った。

「一応、決まったらここにも電話して」

そう言っ、気の良さそうな親父は名刺をくれた。電車で一時間ならば、走れば十分だ。

私は近くの喫茶店に入った。アイスコーヒーでどの渴きを潤し、早めの昼食としてカレーライスを注文した。

ところが食べる人がいるのか、と思ったほど辛かったが、異性人の特性かとも思っ、た。

思い出せば、元々、辛いものは苦手だった。

我慢して食べ終わると、丁度いい時間になっていた。

よし、じゃあ行くか！喫茶店を出て、掛け声一つで走り出したが、
いっこうにスピードが上がらない。

『あれれ、何で？』

集中したが無駄な努力に終わった。『待ち合わせに間に合わないじゃないか！』

気持ちは焦るが速度は上がらない。『カレーか？』私ははつと気が付いた。

何度も思考は繰り返えされたが、それしか考えられなかった。辛いものは能力を鈍らせる。

そう、頭にメモを残した。仕方ない、電話で謝ろう。

「すいません。電車を乗り間違えました。あと一時間待ってくださいますか？」

自分の下手な嘘に幻滅した。相手も嘘と分かっただろうが、待ってくれるとの事だった。

急ぎ電車の飛び乗り、千住に向かった。一時間ほどした時に、電車は千住にたどり着いた。

しかし、待っているはずの相手の返答は、私の期待を大きく裏切るものだった。

第7話

「すみません。他のお客が来まして、一時間待ってください」

私は仕返しされたことに気が付いた。しかも、一時間後に来た男は、今のお客が目当ての物件と契約したと、私に伝えた。

ほかで良ければ見せますよ、と言ったものの、その眼は私を馬鹿にしたように見えた。

私は何も言わずにその場を立ち去った。

また電車に揺られながら、もとの街へと舞い戻ったが、口惜しい思いは拭い去れなかった。

何も出来ないうちに、日は傾き始めていた。せめてマスクでもと気を取り直し、

私はデパートに向かったが、売り場案内に聞いても、変装用のマスクは売っていないかった。

パーティ用品ならあるかも、との情報をもらい見当をつけた店に行ってみた。

しかし、ろくなものが無かった。

口ひげの付いた眼がね、女王様が付けるような派手なアイマスク、フランケンシュタインや吸血鬼の被り物、蛍光塗料で描かれた骸骨のマスク。

どれもぴったりのものは無かった。

もちろんこのぴったりとは、ヒーローとして可笑しくない、という意味だ。

ヒーローのネーミングは、その殆どがマスコミに付けられたものだ。マスコミは、コスチュームやヒーローの能力でネーミングを考える。スーパーマンならば、胸の“S”のローマ字と、驚異的なパワーから付けられ、

スパ ダーマンは、これまた胸に付いた蜘蛛のマークと、

自在に操る系からネーミングを考えられた……っけ？ バツマンは

……、見たとおりだ。

これらの事からも、いかに見た目が重要か問題になってくる。仮に、フランケンのマスクを被り、地上五十センチに浮かんでいたでしょう。

付けられるネーミングは、ゾンビマン、もしくはゴーストマン。そんな所だろう。最悪だ。

奇抜なコスチュームでも構わない。それだけの能力があり、悪人逮捕を軽々とやってのければ。しかし、私の場合その能力に乏しい。

やはり見た目から入るのが好ましく思える。ところが売っているものだと……。

自分で作るのが妥当だと思った。私はコスチュームとマスクを作ることにした。

次に向かったところは、本屋。手芸の本を買うためだ。能力はないが、頭は良い筈だ。

良い案が浮かんでも作れなければ仕方ない。その為の下準備と言っておこう。

本屋は直ぐに見つかったが、男一人で手芸コーナーに行くのは、多少なりとも恥ずかしかった。

どうにか私でも理解できそうな本を見つけ、私はレジに並んだ。型紙から服を作る過程が細かく書かれている（趣味の手芸）という本だった。

レジの女の子は、私の本を受け取るなり、小さく笑った。

いや、笑ったように見えた。バーコードを読み取り、金額を告げるときにも笑った。

今度は確かに笑った。営業スマイルなのか、それとも……。

理由は分からないが、私は顔から火が出る思いだった。

そう思った瞬間、私の口から出た炎が、女の子の髪の毛をチリチリに焦がした。

私は千円札を投げ捨て、本を奪うようにして、店から逃げ出した。

店内には女の子の叫び声が響いていた。

自分の能力を管理することを覚えなくては、と思いながら走った。気が付くと、またもや隣の県まで走っていた。

どうやらカレーによる、能力低下は終わっただけらしい。

昼間の公園まで行き、ベンチに腰を下ろし、本を開いた。

これならば、どうにか作れそうだ。しかし、よく見るとミシンが必要だった。

もちろんミシンなど持つてはいない。これも買わなくてはいけなくなつた。

うーん、出費がかさむ。まだ仕事も新居も決まっていな。

ミシンを買っても今は置き場も無い。困った。非常に困った。

一日も無駄にしたくは無いのに……。

色々考えたが、今日はもう何もすることが無くなつた。いや、ある。能力の自己管理をしなくてはいけない。

自由にコントロールできて、初めてヒーローと呼ばれる。

先ほどみたいに、自分の意志とは裏腹に、危害を加えてしまう危険性があるからだ。

口から炎を出す訓練は、ちっとも進行しないため、かなり前に止めてしまった。

別段無くてもいいような能力とも思えたからだ。

しかし、実際に使用できるとなれば、話は別だ。ちゃんと管理しなくてはいけない。

まあ、出来るようになったということは、進歩しているのだろうと思つた。

頭の片隅に追いやられた訓練方法を引っ張り出し、周りに人がいないのを確かめてから、

口を尖らせた。喉の奥に集中して、胸の中に火を灯すとイメージ描き、ゆっくりと息を吐く。訓練方法を順に思い出し、その通りに実行してみた。

すると、口から小さな火の塊が飛び出した。自分には熱くはない。

成功だ。

喜び勇んでいると、ふと、視線を感じ振り返った。

またも、昼間の中学生が啞然とした顔で立っていた。

「やあ」

口から炎を出しながら、やはり、ありきたりの言葉を言ってしまった。

「うあー」

二人が逃げるのも、慣れっこになってきた。

ともかく、ここには二人が誰を連れてくるか分かったものではない。

早々に立ち去る必要があるそうだ。

本当に逃げてばかりだ、と思いながらも、もと居た街まで戻ってきた。

第8話

「疲れた」

正直に言つて、私は疲れていた。

能力を使うとやはり疲れるのだと、その日は大人しくホテルに戻ることにした。

手芸の本はしっかりと私の手に握られている。

ところがホテルの近くで、良い匂いがしてきた。

焼き鳥の看板があり、入り口近くで焼く匂いが、私の足を強引に引きとめた。

「いらつしゃい」

元気な声が店内に響き渡った。カウンターのみの店だが、おいしいのだろう。

店内はサラリーマンやカップルで混み合っていた。

中央付近に椅子が二つほど空いていたので、私はそこに座った。

「ご注文は？」

元気な声で、気分がよかった。

「とりあえず、ビールを」

随分と走ったので、喉は渴ききっていた。

「ビンですか？生ですか？」

「じゃあ、生で」

私の喉は既に鳴っていた。一分もしない内に生ビールが運ばれてきた。中ジョッキだ。

心配りの効いた店に感謝した。待たせず出されるビール。ジョッキは中。

私の好みと一致した。大ジョッキは飲む間に温まってしまう。

少ジョッキだと早くなり注文の面倒さが残る。

やっぱり、中ジョッキだなと、つくづく思った。

メニュー自体はシンプルに焼き鳥の種類と、常備されたおつまみと

ご飯ものだけだが、

大きな黒板には、今日のおすすめメニューとして、沢山の商品名が並んでいた。

しかも手ごろな値段で、私の好みにこれまたマッチした。

一口飲んだところで、店員が私の前に現れた。

「つまみはなんにします？」

「おすすめの、マグロ刺し、つくねと手羽先、梅ささみと銀杏。

つくねはたれで、手羽は塩でね」

最高の取り合わせに、自分でも満足した。店員は伝票に書き込むと、各担当に大声で伝えた。

「カウンター六番さん、マグロ刺し、つくねたれ、手羽塩、梅ささみと銀杏」

「はい」

各担当の返事も、私の気分を害すことなく、店の雰囲気に合わせていた。

一杯目が終わる頃、マグロの刺身がカウンター越しに差し出された。

「おまち」

「ありがとう、生、もう一杯」

私が言うと、にこやかに頷いた。

そこで店員の目線が、私の手芸の本に注がれていることに気が付いた。

あちゃー、と思ったが、店員の反応は予想外だった。

「手作りの洋服ですか？難しいですよね」

何か懐かしいものを見るような目つきだった。

「君は……」

「昔はデザイナーになりたくて、服飾学園に通っていました。才能がなくて今はこの通りですけど」

一見、ごつそうだが、繊細な神経の持ち主だと思った。

「デザイナー志望だったの？あの世界も厳しいからね……」

そこまで言った私の頭に、素晴らしいアイデアが浮かんだ。

この若者に手伝ってもらえれば……。

しかし、突然言っても可笑しなおっさん程度に思われる。

しばらくは、この店に通って仲良くなつてからだ。

今日はとりあえず布石だけは打っておこうと思い、本を広げて尋ねた。

「私は素人だから、言葉の意味さえ分からないよ。この縫いしろってなんだい？」

「ダメだなあ。基本中の基本ですよ」

笑顔がこぼれた。順調だ。

「教えてもらえればあり難いけどな」

「仕事中だから、またいつか」

こんな話で、きっかけ作りは出来たはずだ。おそらく教えたくてうずうずしているだろう。

人間は、自分の得意分野に興味を持ってもらつと、知っていることを話したくなるものだ。

この分だと、来月あたりにはヒーローとして活躍できそうだ。

早いところ、仕事と住処を探さなくてはと、改めて気を引き締める思いだった。

第9話

三杯ほど飲んでホテルに戻ったとき、女性の悲鳴が耳に届いた。今までの悲鳴とは明らかに違い、切迫した危機感が伝わってきた。今までの悲鳴は、情事の「死ぬー」もあつたし……。

とにかく、その声に集中したが、ただ事では無さそうだと行ってみようと、声を頼りにホテルを出た。

集中すればよく聞こえるが、現場までの距離感は掴めない。

しかし状況から一刻を争いそうだった。全速力で行く必要があつた。ところが、酒の力は能力をアップさせるようだ。

一瞬のうちに、悲鳴の聞こえる現場へと辿り着いた。

どうやらマンションらしい建物から、悲鳴は聞こえていた。

見上げると、十階ぐらいだろうか、女性がベランダの手摺につかまり必死に叫んでいた。

だが、正面は交通量の多い道路で、女性の声は道行く人には届かなかった。

エレベーターでは間に合いそうもない。今にも落ちそうだと。飛ぶしかない。

私は咄嗟にそう思った。五十センチしか飛べないのに？安心召されよ。

そのことは既に確認済みだ。私はマンションの壁から、五十センチのところを飛んでいった。地面でも壁でも、対照があれば常に五十センチなのだ。

どんなに高い建物でも、壁に沿って飛ぶ分にはどこまでも上がっていった。

ただ速度は前にも言ったとおりだ。

七階あたりまで飛んで行ったとき、案の定その女性は力尽き、ベランダの手摺から落下した。丁度真下にいた私は、しっかりと女性をキャッチし、彼女が落ちたベランダまで上った。

運良く？女性には落ちたときに、既に失神していたらしい。

私は顔を見られずに済んだことに、内心ほっとした。

しかし、何故女性にはベランダに掴まっていたのだろう。

不思議に思っていると、部屋の中から物音がした。同居人ではない。私の直感が危険信号を鳴らした。同居人ならば、助けるはずだろう。窓から中を覗くと、覆面を付けた男が、居間の箆笥を物色していた。手には包丁。

明らかに賊だ。女性はこの賊に落とされたに違いなかった。

しばらく様子を伺っていると、賊はベッドルームに移動した。

その隙に、私はサッシを静かに開け、中に忍び込んだ。

背後から取り押さえるつもりだった。もちろん顔を見られたくない。為の考えだった。

ベッドルームの扉に近づき、そつと中を見ると賊はクローゼットを覗き込んで後向きだった。チャンスとばかり足を踏み出そうとした瞬間、悲鳴が聞こえた。しかも、間近で聞こえた。

振り向くと、あの女性がベランダで悲鳴を上げていた。

その視線は、明らかに私に向けられていた。

「シーっ、私は賊ではない……」

無駄だった。女性はさらに大きな声で叫びだした。

「ドロボー。誰か助けて！」

今度は、私が賊に対して後ろ向きだった。声に反応した賊は、密かに私の背後に迫っていた。

羽交い絞めにされたが、かえってラッキーだったと言おう。

賊に顔を見られることなく、倒すことが出来たのだ。たったの肘鉄一発で……。

賊は完全に失神した。その状況を理解したのか、女性は叫ぶのを止めた。

賊を倒したことにより、賊の仲間ではないことを理解したようだ。ベランダから室内に戻った女性は、それでも恐る恐る尋ねた。

「あの……。貴方は……」

「叫び声が聞こえたので……」

私の返答に女性は少し安心したようだった。そして居間のソファに力なく座り込んだ。

そしてしばらく考えるような仕草の後、私に再度尋ねた。

「私……、ベランダから落ちた？」

まずい、気が付いている。どうにか私は誤魔化そうと考えた。まさか、飛んでキャッチしたなどとは口が裂けても言えない。

「……いえ……、その、間一髪でした。でも引き上げたときには、意識がないようで……」

「そう……。てっきり落ちて、もうダメと思ったのよね、確か……」
「それよりも、早く警察に電話して」

私は女性を急がせた。

あまり深く思い出してほしくなかったし、賊が意識を取り戻す恐れもあった。

問題はこの女性だが、特別な能力を見られたわけではないので、その点は安心していい。

急いでここから立ち去りたかったが、女性が「ありがとう、ではさようなら」と、

言うとは思えなかった。女性にガムテープがあるか聞いて、一卷き受けとり、

賊をテープでがんじがらめにした。

「これでよし。では私はこれで……」

何気ない素振りをしながら、私は玄関に向かった。

「駄目よ。居てくれなくては。警察も話が聞きたいって言っていたわ」

女性は玄関まで私を追いかけて、私の腕を引っ張った。
やっぱり無理か、と思いながら振り向くと、女性の顔つきが変わった。

その目はドアのロックに注がれていたのだ。

「ど、どうやって入ったの」

その声は震えていた。見ると、ドアロックは掛けられたままだった。完全に疑われていることは、鈍い私にも理解できた。

このままでは、警察に何を聞かれるか分かったものではない。

つい五日前に事情聴取を申し込んだ警官を思い出した。その事情聴取も受けていない。

銀行強盗もこれでは犯人の仲間扱いされる。仕方ない。

女性にだけは正体を打ち明けるしかないようだ。

女性は共犯者でも見るような目つきで、私から後ずさりを始めた。

「話を聞いてください」

「近寄らないで」

化粧のない顔は、恐怖に引きつっていた。結構な年増だが、若作り。そんなことはどうでも良い。

「私は決して怪しいものではない……」

人の話も聞かずに女性は台所に走り去った。

「待つてください」

台所で包丁を引き出しから取り出し、女性は振りかざした。

「近づいたら刺すわよ」

その目は血走っていた。とても話を聞ける状態では無さそうだ。

「近づかないから、話をきいて」

出来るだけ優しく言ったつもりでも、女性の興奮は極限を向かえそうだった。

「私はヒーローです」

何を言っている！自分の馬鹿さにほとほと嫌気がさした。知能は高いはずだけど……。

「馬鹿みたい。共犯のくせして、私に見られたから、そんな嘘言っているのでしょ」

もう、何を言っても無理そうだ。パトカーのサイレンが直ぐ近くまで迫っていた。

猶予はない。仕方無しに私は飛んだ。

たった五十センチだが、女性を黙らせるには十分だった。

目を見開き、口をパクつかせる女性に、私は静かに話し始めた。

「貴方の言ったとおり、貴方はベランダから落ちました。でも見ての通り、私は飛べます。」

それで助けたのです」

女性は崩れるように床に座り込んだ。

「お願いです。警察にあれこれ聞かれるわけにはいかない。

このまま、行かせてはもらえないだろうか」

その時玄関のドアが、激しくノックされた。

「大丈夫ですか。警察です。開けてください」

私は女性の目を見た。優しく訴えかけるように。女性はただ頷いただけだった。

「このことは言わないで」

そう言っただけで私はベランダに出たが、女性は返事すら出来ない状態だった。

その時、ドアのロックが外された。管理人の合鍵でも使ったのだろう。

私は急いで飛び降りた。

一瞬「あつ」と女性が叫んだように感じたが、今はそれ所ではなかった。

真下にパトカー数台止まっていた。このままでは見つかる。

私はくるりと身をひるがえし、建物を上り始めた。その急な反転に、気分が悪くなった。

腹の中でビールが泡だっている様だ。屋上に着くまでもたなかった。勢いよく、マグロやら焼き鳥をまき散らかした。

おそらくパトカーに直撃しただろう。二十階建て位だろうか、屋上は夜風が心地よかった。

私は一呼吸付いて、気分が落ち着くのを待った。

第10話

手摺土台のコンクリートに腰を下ろし、空を見上げると、多くの星が輝いていた。

故郷はまだあるのだろうか……。そんな想いで見ていると、一際輝きを放つ星が見えた。

もちろんそれが故郷とは解らない。ただ、懐かしさだけは感じずには居られなかった。

気分が落ち着き、私はゆっくりと立ち上がった。夜風が私の髪を優しく撫ぜ回した。

そして周囲を見渡すと、この建物よりも若干低い建物が隣に並んでいた。

飛び移れない距離では無さそうだった。

狭い路地を挟んでいるだけだ。いつまでもここで長居するわけには行かない。

賊の進入経路の確認で、屋上に来る恐れも残っていたからだ。

しかし、ジャンプもあまり得意ではない。だから思い切り助走を付けてジャンプした。

私の身体は、鳥になったように夜空に浮かんが。楽勝だ。思ったが、飛びすぎた。

隣の建物を余裕で飛び越えてしまったのだ。その先には……。何も

ない。これでは五十センチの飛行術も役には立たない。落ちるに任せるしかなかった。

なるべく身体を丸めて……。

幸い落ちたところは土の露出したところで、怪我はない……。様に見えたが、左足に鉄筋が刺さっていた。脹脛のところだ。

「なんだー、痛てー」

私は思わず叫んでしまった。しかし、引き抜くしかなかった。

勢い欲引き抜くと、辺りに血が飛び散った。

しかし引き抜いた後は、見る見る傷が回復するのが分かった。

痛みは感じるが、回復は早いようだ。ところが、完全に回復しても、痛みは残った。

神経過敏だな。

足を引きずり表に出ると、マンションの建設予定地だと気が付いた。完成予想図画が壁に張られていた。

どつりで鉄筋があるわけだ。もつと早く造れよ。と怒鳴りたかった。振り返るとまだ、マンションの前にはパトカーは止まっていた。

目を凝らすとさらによく見えた。そう、私の汚物がべつとりと付いた様子がよく見えた。

耳を澄ますと「誰だ」と怒鳴る警官の声も聞こえた。

私は助けた女性が気になって仕方がなかった。

変なことを話してなければ良いと、野次馬を装い近くまで近づいた。耳を澄ますと、女性と警官の話す声が聞こえてきた。

一度聞いた声だから、探し出すのは容易だ。

「電話で話していらした男性は？」

「気が付いたら消えていました」

「犯人を縛ったのは？」

「男性です」

「我々が到着したとき、鍵は掛けられたままでしたね。

その男性はどこから帰ったのでしょうか」

しばらく間があつてから、女性は答えた。

「さあ、電話中だったので、見ていません」

どうやら女性は口を閉ざしてくれたらしい。まあ、真実を話しても誰も信じはしないだろう。私は安心して、ホテルに戻ろうとした。

ところが、やけに他の野次馬が私を見る。そして笑うのだ。

それもそのはず、私はホテルの寝巻き姿だった。

鉄筋を引き抜くときにも、焦っていたせいで気が付かなかった。

馬鹿だ。顔から火が出そうだ。おっと、気をつけないと本当に火を

吐く恐れがある。

私は照れ笑いを浮かべながら、その場を離れた。

そして、人目のない裏路地で全力疾走の体勢に入った。

もう痛みはない。と、何か視線を感じた。見ると、あの中学生がじっと見ていた。

「やあ」

その時私は既に走り出していた。夜遅くに不良少年と思ったが、

「うあー」

と逃げ出しているだろうと考えると、つい笑ってしまった。

走る姿は早すぎて人には見えない。

地続きならば、かなり多くの人助けが出来そうだと、私は確信した。ともかく急いで帰らなければ、寝巻き姿ではどうしようもない。

戻る間も、助けを求める声は聞こえた。

差し迫っているようには聞こえない。自分の中でもこれである程度の基準は出来たと思う。

聞こえる叫び全部をまわることなど、所詮は出来ないのだから。

第11話

翌朝、気分よく目覚めた私を震撼させる出来事が起こっていた。
テレビのニュースは、昨夜の事件で持ちきりだった。

あの、若作りの女性は、警察に言わなかったが、マスコミに話してしまったのだ。

（寝巻き姿の謎の男性、女性を助け、賊を退治）
なんて見出した。報道内容はざっとこんなところだ……。

（昨夜九時ごろ、住居侵入の賊が入り、被害者の女性をベランダから突き落とした。

ところが空飛ぶ寝巻き姿の男性に助けられ、しかも賊まで退治した。

男性は警官の到着を待たず、その場から姿をくらませた。被害者の女性が言うには、

ベランダから飛び去ったとの事です。）

しかもキャスターは言いたい放題だった。何故、寝巻きなのか？本当に空を飛べるのか？

何故、警官の到着前に逃げ出したのか？

『逃げたとは失敬な……』

私は腹が立ったと同時に無様なヒーローだと、情けなくなった。

締めくくりは、夢でも見ていたのでしょうか。と来たもんだ。

これでまともなコスチュームでもあれば、堂々と出来たはずだと思っただ。急ぐ必要がある。

今日もあの焼き鳥店に行かないと……。まずはその前に朝食だ。

今日こそ昨日の無駄を挽回をしなくては、仕事と住みか。それが最重要課題だ。

昨日と同じ喫茶店でモーニングを食べ、職安に向かった。

不景気なのは分かるが、求職者が多く所内は混雑していた。

いい仕事がないかと、皆躍起になって求職カードを見ていた。新規のカードが配布されると、我先にとカードに群がった。

見ればまだまだまともな人間ばかりで、職探しに躍起なる様には見えなかった。

リストラの嵐が吹き荒れる中、その嵐に巻き込まれたのだろう。

女房子供のためにも、前職よりも待遇が悪いところへは転職できない。

給料が下がることを、女房族は認めてはくれない。大変な時代だ。

その点私は独り者。

食うに困らない程度の収入があれば、文句はない。それよりも、大事な使命がある。

ここにいる求職者の中では気楽なものだ。と、思っていたが、大間違いだった。まずは年齢。

それから最終学歴に実務経験にいたるまで、私に当てはまりそうな仕事は見つからない。

言い換えれば、誰も私を必要としないのである。

係りに尋ねても、難しいね、と首を傾げるだけ。

それでも、幾つかは紹介してくれたが、どれも遠くの工場勤務だった。

よく聞く、期間工員で、寮は完備されているが、夜勤もあり人助け所ではない。

いくら早く走れるからと言っても、毎日、都会まで来ることが出来る距離でもなかった。

唯一、都会で出来る仕事は、清掃員だった。しかも夜間のビル清掃で、ヒーローとの、

二束の草鞋には向かない。これならば、喫茶店のバイトのほうがましだった。

そこで、私が思いついたのは、レストランの皿洗い。食事も出来て一石二鳥だ。

私は昨日と同じコンビニで、求人誌を買った。月曜は多くの求人誌

が発売される。

三冊ほど買い込んで、ホテルに戻った。どこかの公園でもとも思ってたが、昨日のことがある。

ホテルでじっくりと読むことにした。部屋には電話もあるし、気になる求人情報があれば、

直ぐ連絡できる。

良さそうな情報が載っているページを折り曲げ、三冊とも目を通した。

折り曲げたページを更にじっくりと読み、応募資格を丹念に調べた。結局、私でも雇ってくれそうなところは、五社ぐらいだったが、片端から電話を掛けることにした。今まで転職ばかりの私には、造作もないことだ。

そのうち、二社と面接までこぎつけ、昼過ぎに訪問の約束を取り付けた。

一時と、二時だ。面接の二社は、多少距離は離れてはいるが、私には問題ない。

まだ時間はある。そろそろ昼食時間だ。

カレーは止めよう。もう失敗はしたくもないし、する余裕もない。どちらか仕事が決まれば、その足で不動産屋を回ろうと考えていた。さて困った。昼食は何にするか？昨日みたいな失敗は出来ない。

ラーメンとも思ったが、味噌や醤油が悪ければどうする？

簡単に牛丼とも考えたが、肉が悪ければどうする？定食屋の焼き魚。魚が悪ければどうする？

結局は、昼食抜きと結論を出した。食べなければ、問題ないはずだ。その間、私は本屋に向かった。今日はコミックのコーナーに向かい、それとなくヒーローのコスチュームを比較しようと考えた。

レジの女の子が心配だったが、今日はいない。髪がちりちりでは無理からぬことだが……。

立ち読みしながら比較して、私なりに気づいたことがある。

アメリカンコミックのヒーローのほうが、日本版ヒーローより現実

的だ。

日本のヒーローは突飛過ぎた。改造的で合体ものが多い。チームが多く、単体はあまりいなかった。ウル ラマンは家族勢ぞろいだ。

しかし、日米どのコスチュームも、身体にぴったりしたものが殆どだった。

中年腹の私には、とても着られるはずがない。

何か身体前面を隠すようなものが必要に思えた。

野球のキャッチャーのプロテクターなど良さそうだ。

勿論あのままだとヒーローと呼ばれない。見出しも

（野球帰りのおっさん、女性を助ける）

になりそうだ。ヒーローらしく飾る必要がある。一緒にマスクはどうだろうか？駄目だ。

（十三日の金曜日）

的になる。スー ーマンみたいに顔丸出しにするか、スパ ダーマンみたいにすべて隠すか、

あるいは、バツ マンみたいに半分隠すか。丸出しは無理そうだ。

そんな自慢の顔ではない。

今ではありふれたおっさん顔だ。

（いかれたおっさん、いかれた衣装で女性を助ける）

になる。いかれた衣装でなくとも、寝巻き姿でさえテレビで馬鹿にされる。

どんなネーミングにされるやら、である。そんなことを考えていると、

無性に今朝のニュースキャスターがムカついて来た。人権損害で文句を言おうか……。

無理だ。私は人ではない。はっきり言えばエイリアンだ。

エイリアンに人権尊重は当てはまらないだろう。

中年太りのエイリアン。聞いたこともない。そろそろ時間だ。

面接に遅れるわけにはいかない。

本屋を出て、人通りの少ない裏道に向かい、全速力で走り出した。が、早くない。

またかよ。今日は何が悪い？答えは簡単だった。食べてない。ゆえにパワーが出ない。

急いで牛井屋に駆け込んだ。ビールだけを注文し、一気に飲み干し店を出た。

これでパワーアップするはずだ。アルコールがパワーをアップすることは、経験済みだった。案の定、あつという間に一社目の会社に着いた。

約束の五分前だ。胸を撫で下ろし堂々と会社に入っていた。

食堂からレストラン、居酒屋からバーまで、飲食事業全般に展開する会社だった。

事務の女性に訪問の用件と、面接官との約束を伝えた。しかし、女性はいく目で見ていた。

何故だ。服装に可笑しなところはない。どこか、汚れているわけでもない。

きつとそんな目つきなのだろうと、勝手に納得した。

ところが、面接官も、露骨に不快感を表した。

「わざわざ来てもらったけど、不謹慎だね」

「はあ？」

私は訳が分からず聞き返した。

「何がいけないのです」

「面接はしてあげるから、その前に顔を洗ってきなさい」

面接官はそう言うのと、洗面所を指差した。不思議な思いで洗面所に行くのと、

鏡に映った自分の顔に驚いた。顔は真っ赤で目はトロン、完全な酔っ払いだ。

たった一本のビールでも、走ったお陰で酔いが回ったらしい。

何度か水で顔を洗い、面接は受けたものの、結果は散々……。お分かりだと思う。

しかし、落ち込んでいる暇はない。二社目の面接まではまだ時間がある。

なるべく走らず、移動することにした。電車でもふた駅だ。駅のトイレで鏡を覗くと、酔いは醒めているようだった。

人助けで急いでも、酒は飲めないと思った。酒の力を借りてしまえば、

（赤ら顔の酔っ払い、女性を助ける）

になってしまう。赤鬼マンか？やはり顔は全部隠さないといけないみたいだ。

第12話

二社目は、関東周辺でファミリーレストランを展開する、一応は名の通った会社だった。

受付の女性は愛想も対応も申し分ない。面接の内容説明も分かりやすかった。

全てマニュアル化されているようだ。

「今回の募集は、皿洗いと厨房補助のパートタイマーですが、問題ありませんか？」

おそらく、いい親父が何でこんなパートに、と思ったに違いない。私は気にしない。

飯の姿なのだから。

本職はヒーローだ。しかし、職業と呼べるのだろうか。

給与が出るわけでも、出来高報酬をもらうわけでもない。

あくまでもボランティアにすぎないかも……。すると、本職は、皿洗いのパートさん。

と言うことになりそうだ。

どうでもいい事だ。パートと言っても、法の改正により、パートの待遇は向上している。

中でも一番嬉しかったのは、午前十一時から働けば昼食の賄いが食べられ、

夜八時まで働けば夕食の賄いが出る。

それぞれ一食百五十円だが、表で食べるよりは、断然お得だ。

私は希望勤務時間を、迷わず午前十一時から午後八時にした。

ヒーローの活動時間をずらせば問題ない。

午前十一時から勤務ならば、深夜も人助けが出来る。午後九時から深夜二時。

ヒーローの時間はこれでいいだろう。

しかも採用決定されれば、都内数箇所の店舗から選ぶことが可能で、

勤務場所としても最高だった。給与もそれなりだった。

九時間の拘束時間だが、昼と夜の休憩で一時間引かれ、実働八時間。時給八百二十円で一日六千五百六十円。月に二十日勤務で、十三万千二百円。

家賃を払い、公共料金を払っても、十分やっていけそうだ。

しかも、勤務場所が複数から選べることによって、

アパートの選択場所が多いに増えたことにも感謝したい。

面接官とも円滑に話が進んだ。しかも、面接官は、あの銀行強盗のニュースを見ていた。

「貴方がいれば心強い」

そう言つて面接官は握手を求めた。商売柄、客を装い難癖をつける人間がいる。

と面接官は話してくれた。

意外なところで神様は手を差し伸べてくれた。待てよ。

私の故郷には、神とかいるのかな？ 仏様は？

第一に、宗教があるのかさえ分からなかった。

後日、採用結果を連絡します、と面接官が言ったので、ホテルの電話番号を伝えた。

どちらにしろ、採用は決定しただろうと思った。店舗のリストはもらつて来た。

これで不動産屋も探しやすくなった。

面接でいささか緊張したのか、喉が渴いた。

近くのコンビニで、賃貸情報誌を購入して、喫茶店に飛び込んだ。

昼食も取っていないので、野菜サンドと、アイスミルクを注文した。

健康的な注文だと思った。

そして店舗リストと照らし合わせ、良さそうな不動産屋をリストアップした。

勿論この、良さそうとは、賃貸料がマッチすると言つた意味合いだ。都内では、人気のある街とない街では、賃貸料も極端に違つていた。私としては、人気があるうがなかるうが、一切気にしない。

めぼしい物件が揃っているところに電話を入れたが、
近くだとの事で店舗まで行くことにした。

「どんな物件をお探しですか？」

対応に出た若い男に、私は雑誌のページを見せた。

「このアパートの詳細はありませんか？」

男は雑誌を覗き込み、残念そうに答えた。

「その物件は、決まりました」

「では、これは」

違う物件を見せたが、返事は同じだった。

更に、三件目も同様の返事がかえり、客寄せのさくら物件だと分かった。

若い男は、机の上に数々の物件を並べ、しきりに勧め始めた。

しかも、こちらの予算などお構い無しだ。適当に返事をして、その店舗から逃げ出した。

しつこさも然る事ながら、客の意見は完全に無視していた。付き合い
わされてはいられない。

他の不動産屋に行ってみたが、どこも同じだった。

昨日の不動産屋がまともに思え、行ってみる事にした。

しかも、今日は場所などの制限が、昨日より有利だ。

きつといい物件を探してくれるような気がした。

「やあ、いらっしゃい。昨日は駄目だったみたいだね」

その親父は私を覚えていた。昨日の今日だから忘れもないと思う
が……。

しかし二度目の来店とあって、かなり親身に探してくれた。

そして、いい物件を見つけ出してくれた。

家賃は四万三千元。敷金、礼金一。バス、トイレ付きのワンルーム
しかも作りはかなり広そうだった。申し分ない。

場所も決して遠くはなく、人気の街までも近かった。

直ぐに見られると言うので、私は同行することにした。自社物件ら
しい。

親父は留守を奥さん？だろうが、年配の女性に頼み車を持ってきた。しかし、親父はどこか落ち着きなく見えた。

「四十分ほです」

そう言うと、アクセルを噴かした。

かなりガタがきている車だったが、走行には支障がなかった。

ただ、排気ガスは真っ黒だ。不完全燃焼を起こしているのは、紛れもない。

その手の車に乗っていると、私などは周囲の目を気にしてしまうが、親父は気にも留めてないようだった。

しばらく走り、車は国道から脇道に入り、狭い路地をゆつくりと進んでいった。

商店住宅地とでも言うのか、自宅兼商店の店が並んでいた。

電気店から床屋、駄菓子屋もある。どことなく子供の頃に戻ったような気になった。

その商店を抜け、坂道を登ったところにそのアパートはあった。

蔓で覆われた建物は、それ自体が巨大な植物に見えた。

その中にも、西洋文化の香りが漂っていた。

壁の所々から顔を覗かす女神の？彫刻や、ライオンか何かの獣の顔の彫刻。

どつしりと構えた石柱が確認できた。

「昔は、どこかの国の、軍人宿舎だったそうです。作りはお洒落ですが、古い建物です。」

内装は綺麗に直してあります」

その部屋は、二階の隅にあった。外見とは異なる内装で、畳が敷かれ風呂も今風だった。

嬉しいことに追い炊き式で、光熱費の節約になりそうだった。

日当たりは西向きのため、あまりよくないが、私は気に入った。

契約したいと申し出たとき、親父の顔つきが変わった。

「一ついいですか」

なんだ、何か問題でもあるのか？実は敷金が二つです。なんて……。

「気に入っていただけだから、話しますが、昔ここで、若い女性が自殺しました」

「おいおい、何をいまさらと、思ったが。別段気にすることはなかった。」

「自殺者がいても、幽霊が出るわけではない。出たとしても、私はヒーローだ。」

「ちよいちよいとやつつけてやる。」

「話では、出るみたいですよ」

「本当ですか」

「驚いた振りをした。」

「中には気にしない人もいるので、たまに連れて来ます。気に入って入居しても、

一週間と持ちません。貴方はどうですか？」

「どうですかって、言われても、実際見た訳でもないし……」

「私は困った。幽霊など信じなかったが、いざ自分がエイリアンだと分かった時、

何でも信じられるようになったのも事実だ。しかし、自分には特別な能力が備わっている。」

「幽霊の一人や二人どうって事はない。」

「第一に、人間の幽霊が、エイリアンを脅かすなど、聞いた試しもなかった。」

「しかも、親父は礼金も要らないと言い出した。これはもう、借りるしかない。」

「店舗に戻り、私は契約を交わした。それから急いで引越しの準備に取り掛かった。」

「前のアパートには報道陣もなくなり、レンタルしたトラックに、手当たり次第に詰め込んで、翌日には引越しは終わっていた。」

「電気会社にガス会社、電話会社など全て連絡し、滞りなく転居は終了した。」

「ホテル住まいとも、これでおさらばだ。電話の転居も予想以上に早

く済んだ。

今では携帯に押され、固定電話の普及率が極端に下がり、電話会社ではサービス向上に躍起になっていた。

面接した会社にも新しい連絡先を届けた。

後は……。あつ、焼鳥店……。忘れていた。

あの青年から教えてもらうつもりだったが、引越したことによつて、

店まで遠くなってしまった。私には問題ないないが、彼のほうには問題が残りそうだ。

仕方なく別の手段を考えることにした。あの商店街で何か知恵が浮かびそうに思え、

買い物がてら私は商店街へと足を向けた。

子供の頃、駄菓子屋の軒先で悪戯の知恵が浮かんだように、なにかが浮かぶ気がした……。

第13話

その夜、寒気を感じ夜中に目が覚めた。引越し疲れもあり、早めに床に着いたが、

荷物は散乱したまま、カーテンすら取り付けていなかった。

隙間風だろうと、私は布団を被って眠りに着いた。翌朝は気分よく目が覚めた。

やはりホテルとは違う。長くホテル住まいをした事のある人ならば、気がつくはずだ。

ホテルは何故か監視されているような気分になる。

心から落ち着けないのが本心だった。しかも、親父の言うような、怪奇現象？

などもなかった。気分も良く朝から風呂に入ることにした。

なぜならば、建物自体は頑丈な作りの為、周囲の音は聞こえてこない。

勿論、耳を澄ませば私の場合全て聞こえるが、朝から風呂に入っても、

周囲の迷惑にはならないと言う事だ。その点でも私はここが気に入った。

お茶を飲む間に、風呂は出来上がった。

以前の私は、朝、コーヒーを飲んでいたが、お茶に代えた。

どうもコーヒーも能力に関係するらしい。

今のところは、人間に対しての刺激物（香辛料やコーヒー、酒）は、エイリアンの私にとっても刺激物らしい。反応は異常なほど敏感でまちまちだが……。

出来るだけ摂取しないほうが懸命に思えたからだ。

入浴前の適度な水分補給は美容にも良いらしい。

汗の出がよくなり、毛穴から老廃物を押し出す効果が増すそうだ。

ヒーローとして活躍するためにも、綺麗でいたい。洗面所の鏡に裸

の自分を映し、

色々調べた。強盗のときの傷は跡形もなくふさがり、肌の血色も良く見えた。

錯覚かも知れないが、顔のニキビ跡も完全に見えなくなったように思えた。

腕の筋肉は盛り上がり始め、胸板も厚くなったように感じる。残るは出っ張った腹のみだ。

能力の鍛錬とともに、腹筋にも力を注ぐ必要があるようだ。

色々なポーズをとって、鏡に映してみた。その時、私の後ろを黒い影が横切った。

いや、そう鏡に映った。振り返り周囲を見渡したが、誰もいない。考えればお茶も刺激物？かも知れない。錯覚だろうと風呂に飛び込んだ。いい湯だ。

気持ちがいい……。と思ったが、そうではなかった。異様な雰囲気、に風呂場全体が包まれ、

ひどい寒気を感じていた。湯船につかりながらも寒いのだ。

お湯は湯気を立てるほどに暖かいのに……。ふと背後に人の気配を感じ振り向いた。

そこには、長い黒髪の女？がいた。垂れ下がった髪の毛のため、顔は見えないが、

一緒に湯船に浸かっていたのだ。出た！親父の言うとおり出たのだ。私は凍りついたように動けなかった。

やがて湯の中から、青白い手が伸び、私を引きずり込もうとした。ところが、私の力は人間の数倍はあるだろう。

青白い手は必死に引きずり込もうとしていたが、私はびくともしなかった。

既に恐怖心はなく、そんな必死な幽霊が可笑しくなった。その幽霊？が顔を上げると、

まだ若い女だと分かったが、悲しい目をして私を見ていた。不憫に感じ私は話しかけた。

「お嬢さん、無駄ですよ」

女の顔は見る見る恐ろしい形相に変わり、両手で私を引きずり込もうとした。

が、私はビクともしない。息切れする幽霊を見たことがあるだろうか。

このとき私ははっきりと見た。肩で息をする幽霊を……。やがて「何でなのよ」

と弱音を吐く幽霊をたった今見た。幽霊は困ったように首を振り、いやいやを繰り返した。駄々をこねる幽霊。滑稽だ。

「私は人間ではないからだよ」

私の答えに幽霊は心底驚いた様子だ。幽霊を脅かすエイリアン。映画になりそうだ。

「ごめんね」

何故、謝ったたか自分でも分からない。おそらく可愛そうに思ったのだろう。

しかし、相手も流石の幽霊だ。今度は興味を持ち始めた。

「えーっ、どこの星なの」

恐ろしかった形相はかわいい女の子に変わり、目を輝かせて話し始めた。

「よくわかんない」

私はことのあらましをかいつまんで話した。

「じゃあ、修行中な訳ね」

「そう、話したとおり、初めが遅すぎたのでね、必死な状態だよ」

「私も、幽霊の修行中は大変だったわ。初めは何も出来ないの。」

物を動かしたり電気を消したりするまで、結構な時間が必要だったわ。

でも、未練の度合いが強かったのかしら、他の人より上達が早いって褒められたわ」

「褒められたって、誰に？」

「勿論、先輩諸氏よ」

「先に死んだ人かい？」

「そうよ。まずは、死んだ人のところに迎えに来るの。でも、行くことを拒むと、

別の霊が幽霊の心得を教えてくれるわ。悪霊だけど、この地でどう過ごすかをね」

「結構、親切だね。私には先輩すらないし、伝授してくれる人もいないから、大変だよ。

でも毎日が発見の連続で楽しいけど」

「私も、宇宙人など信じてなかったけど、不思議なものね。死んでからのほうが、

色々発見があるのよ、結構楽しいわ」

「君の場合……。ごめん名前は？」

「弘子。だったわ」

「偶然！私は弘」

弘子は驚いたようだったが、やがて二人は手を取り合って笑っていた。

朝から風呂場で、幽霊とエイリアンが手を取り合い笑う。誰も想像すらしないことだろう。

しかしそれがきっかけとなり、弘子は度々私の元に現れるようになった。

第14話

弘子は現れる度に、生前の出来事を話してくれた。

元は美大の学生だったが、彼氏に浮気された拳句に、殺されたらしい。

しかし、証拠不十分で彼氏は無罪。結局は、自殺扱いになったそう

だ。その恨みと、志半ばだった画家への想いが未練として残り、成仏できならしい。

いや、成仏しなかったらしい。弘子の話では、成仏も自由意志に依るそう

だ。ところが恨みを晴らし、天界へと向かったが、多くの人を殺めたせいで、

天界を締め出されたそう

だ。かなり恐ろしい霊だったよう

だ。そこで私は弘子に聞いてみた。

「今でも絵はかけるの？」

「出来るわ、筆筭だって動かせるのよ。鉛筆なんて朝飯前よ」

そう言つと、私が差し出した紙と鉛筆で、弘子はすらすら絵を描き始め。

「うまい！」

私は思わず叫んだ。弘子から受け取った紙にはミロのビーナスが見事に書き写してあつた。

「本当は油絵専門だけど、デッサンも得意よ」

弘子の笑顔は美しかった。幽霊とは思えない。私は恥ずかしかったが、弘子に尋ねた。

「ヒーローのコスチュームを考えてほしいのだけど……」

「えっ？……。あー、描いてほしいの？」

「そう、私は絵心がないし」

「コスチューム？私も得意ではないけど……。でも、面白そうね。」

考えてあげる」

すると、弘子は姿を消した。どこに行ったのかと思っていたら、突然、弘子が舞い戻ってきた。

「どこに行っていたの？」

「ふふ、漫画家のところよ。覗き見してきたの」

そう言っていると、弘子はなにやら描き始めた。私は弘子の能力に脱帽した。

一瞬で好きなところに飛んで行き、誰にも不審の思われず行動する。幽霊はヒーローになる素質を十分に持っている、私は心底そう思った。

弘子の絵は見事なデッサンだ。私は覗き込みながら、自分の希望を付け加えた。

顔は隠して、突き出た腹も目立たないような衣装。

弘子は何度も描き直しながらも、それは徐々に形を成してきた。

全体的な雰囲気は、目立たないことを条件に、黒が基本となった。

黒はスマートにも見えるし、一石二鳥だ。

黄色のラインが身体を取り巻き、さながら工事現場だが、

弘子曰く、トラのイメージだそうだ。

しかし、タイガーマスクではない。マントは協議の結果、ボツになった。

飛べない？私には無用の長物だと。

コンセプトはスパイーマンに近いものだ。全身はフィットした感じだが、

バツマンのような胸当てがついている。マスクは目の周りだけが黄色い。やはりトラだ。

なぜか？私は寅年生まれだ。弘子も寅年だった。

ただ、弘子は私よりも二周りも先に生まれたが……。

ついでに、胸には（H）のマークを入れてみた。勿論、私と弘子のイニシャルである。

完璧だ！！マスコミがどんなネーミングを付けるのか、今から楽し

みだった。

私は、絵に集中する弘子に聞いてみた。

「私は遠くの声聞き分けられるが、弘子の場合はどうだい？」
既に、呼び捨てあう仲だ。

「私は無理よ。でも近くなれば、心も読めるの」

そう言つて目を閉じた。何をするのかと思つたが、目を伏せた弘子は美しかった。

幽霊でなければ、押し倒し……。なんて人間的な考えだろうとにやけていると、

「嫌だ、変なこと考えて」

弘子は私の心を読んでいたのだ。私は慌てたが、弘子は笑顔だった。
「でも、嬉しいわ。ありがとう」

正直、恥ずかしかった。しかし、幽霊とエイリアンの恋物語も面白そうだ。

映画になりそう……。

「私ね、初めは貴方を信じなかった。でも、心を覗いて分かったの。真実だつて」

弘子はそう言つて肩をすぼめた。

「出来た。これでどう？」

出来上がったデッサンは、最高の出来だった。だが、問題は残る。制作が問題だ。

どんな生地を使い、どうやって仕上げるかが見当も付かなかった。弘子はしばらく考えていたが、やがて何かを思いついたらしい。

「待っていてね」

と一言残し、そして姿を眩ました。しかし、いつまで待っても弘子は戻ってこなかった。

仕方無しに、夕食の買出しに向かおうと思つたとき、

不動産屋の親父から電話がかかって来た。

「どうですか」

その声は僅かに震えていた。

「問題ないですよ。楽しく生活しています」

「楽しく？」

「いえ、何でもありません。気になさらずに」

まさか幽霊と親しくなったとは、言えないだろう。

不動産屋の親父は、恐縮したように、何かあったら言ってください、
と言いつつ電話を切った。

例の商店街で買い物しようと思えば坂を下り、小さな商店に足を踏み入
れた。

店主は初めてみる顔に、いささか用心したようだ。

店には食料品や、日用品が並べられていた。

昔ならば、迷わずカップラーメンに手を伸ばしていただろう。

しかし今は、豆腐や果物、脂身の少ない肉、小魚の干し物など、

一般的には健康的と思われるものに変わっていた。

そして私が牛乳に手を伸ばしたとき、弘子の声が耳元に聞こえてき
た。

「日付をよく見て。ここの親父は古いものでも平気で売るから」

振り向くと弘子が立っていた。正確には浮いていた。

しかも、見慣れない人物までもが一緒に浮いているのに気がついた。

「その人は？」

「後で紹介するわ。先に帰っているから早くね」

そのまま弘子とその連れは、スーツと消えて行った。何か新婚夫婦
の会話みたいだと、

ニヤけていると、店主が不審そうに見ていた。勿論、店主に弘子達
は見えるはずもない。

変なおっさんが食品売り場でニヤついていたなら、不審がられても可
笑しくはない。

一応、挨拶はしとくべきだと思った。これからも利用する可能性が
あるからだ。

来る度に不審がられるのもいい気分はしない。

「今度、坂の上のアパートに越してきました。利用すると思うので、

よろしく」

そんな簡単な挨拶でさえ、親父の顔は急に笑顔に変わった。

「そうですか、いや、こちらこそ御贔屓にお願いします。変な顔していませんでしたか？」

物騒な世の中なので申し訳ない」

店主は自分でも理解しているようだ。と言うよりは、初めての客を『見ているぞ』と、

脅かすのが店主の行動パターンとして確立されていた。

「こう言っではなんですが、そのアパート、過去に殺人事件があったそうですよ。」

もっとも私はまだ子供でしたから、聞いた話ですがね」

店主は、商品を袋に詰めながら呟くように話した。

黙っていたら、話が長くなりそうな予感がしたため、料金を払うと早々に商店を後にした。

第15話

アパートでは、弘子とその連れが、デッサンに見入っていた。

「お帰りなさい」

弘子の元気な声が聞こえた。

「ただいま」

ほんとに新婚みたいだ。

「もう、嫌だ」

弘子は私の心を読んだ。しかし、笑顔は絶やさない。

「そちらは？」

「ごめん、紹介するわ。こちら夕子さん、私同様に彼氏に裏切られた口なの」

「始めまして」

私が手を出すと、夕子と呼ばれる幽霊は、それこそ幽霊を見たような驚きの顔で

私の顔をまじまじとを覗き込んだ。

「この人がエイリアン？」

夕子は弘子に尋ねた。

「そうよ、人間そっくりでしょ」

「見た目じゃ分からないわ」

ふざけた会話である。幽霊二人がエイリアンを分析しているのだ。

「あつ、ごめんなさい」

そう言つて、我に返った夕子は気を取り直して私の手を握った。：

ように感じた。

実体がないから仕方ない。その後も夕子は何度も感心していた。

「幽霊でよかった。そうでなければ会えなかったもの。へー、エイリアンか、居たのね」

「夕子さんはね、裁縫の達人なの」

その説明で、何故に弘子が連れてきたのかが理解できた。

コスチューム作りを手伝わせるつもりだ。

「そうですか。それで協力してもらえますか？」

私は夕子に尋ねた。

「勿論手伝うわ。弘子さんを殺すような人間は一杯いるの。少しでも捕まえ、救ってほしい。それが唯一の条件よ」

夕子の答えは至極まともな意見だと思った。

「分かりました」

私ははつきりと答えた。

「では決まり。ただ、私は物を動かしたり出来ないの。幽霊になったときサボったせいね。

やり方を教えるだけよ。それでもいい？」

「もちろん」

私は即答したが、正直不安だった。その心を見透かしたのか、

「大丈夫、私も手伝うわ、女ですもの」

と、弘子が助け舟を出してくれた。幸せだ！本心からそう思った。まずは、夕子の言うように、制作に当たったの準備に取り掛かった。生地を選択、道具の調達。中でも、胸当て部分の材質が問題だった。しかし、何をするにしても、お金がかかりそうだ、貯金も多くは残っていない。

アパートの経費が安かったのが救いだ。待てよ？

面接会社から連絡来たか？そろそろ一週間が過ぎようとしていた。

店舗リストを思い出し、本社の担当に電話しようと受話器を持ち上げた時、弘子が止めた。

「止めて」

「なぜ？」

「無駄な時間を過ごしてほしくないの」

弘子のその目には悲しみが宿っていた。

「無駄な時間？」

「……そう。ヒーローになるには大変よ。仕事なんか忘れて」

「しかし、食うに困っては……」

私の言葉を遮るように弘子は、かなり多くの紙幣を私に差し出した。「これは？」

「私の全財産。仲間もあるわ。死んで分からなくなったお金は、随分とあるの。」

隠したお金と言ったら分かる？」

「へそくりみたいなの？」

「そうね。もつと大きな例えもあるわ。隠し金とか、犯罪がらみだけれど持ち主が死んで、

そのままになっていくお金は、すごい額よ。貴方一人ならば、ほんの一握りで賄える。」

幽霊仲間の希望なの」

悲願にも似た表情に、私は戸惑った。死んでしまったとは言え、人の金である。

はいそうですかと貰う訳には行かない。

「採用の電話は私が断つとききました」

弘子はおどけて見せたが、の気持ち嬉しかった。ただ後ろめたさは私の心に残った。

「気にしないで、持ち主には了解を得ているし、死んでは使えない。そのうち誰かに発見され、寄付されるか、ネコババされるかしかないの。」

貴方ならば、皆、喜んで出すわ」

確かに財産は死んでは意味を成さない。天国には持っていけないのだ。

薄情な家族に残したくもないのに、法律によって分けられてしまう。死んだあとに、財産をめぐるトラブルを見せられたとしたら、それこそ成仏できなくなるだろう。私は弘子たち幽霊の行為に甘えることにした。

御礼を言いたくても、こちらからコンタクトは取れない。

せめてもと、心の中でお礼を言っしかなかった。

その日の午後、私たち？は買い物に出た。やはりミシンは必要ら

しい。

しかも厚手も縫える、業務用のミシンだ。それから、ベースの生地。実際に手で触り、伸縮性を調べる必要があった。

夕子の案内で、生地の間屋街へと足を運んだ。夕子もなかなかの美人だ。

両手に花の気分で、私の心は浮き立った。

だが、道行く人には、変なおっさんがニタニタ笑っているようにしか見えない。

残念だ。自慢出来たのに……。

「余計なこと考えない」

弘子につねられた。夕子には読心術もないらしく、きょとんとした目で見ていた。

「ここよ」

夕子は問屋街の中の一軒の店に入って行った。

おっと、気をつけないと、私はドアを通り抜けられない。

夕子の話では、かなり特殊な生地まで揃い、映画関係者も仕入れに来るそうだ。

夕子のお勧めはメリヤス生地だ。伸縮性に秀でて身体にフィットするそうだ。

確かに引つ張るとよく伸びる。問題はその他のパーツ部分だ。

胸当てや目の周り、そして黄色のライン。

夕子の話では、フォームラテックスと言う素材が良いらしい。

これは、実際にスパイーマンにも使用されているそうだ。あの、網目部分だ。

ただ、素人が簡単に加工できるものではない。

しかも、映画と違って秘密にするとなれば、なおさら困難だった。製作会社に持ち込めないのだから、いた仕方ない。

その解決策は、弘子が考えることになった。衣装三着分のメリヤスを買う込み、店を出た。

もちろん色は黒である。この店の特徴は、色の豊富さでもあったが、

迷うことはなかった。

何故、三着分かといえば、制作には失敗もあるからとの夕子の返答だった。

そのあとミシンも買ったが、もちろん配達だ。とても持ち帰れる代物ではなかった。

本当は軽々持てたのが、通行人にどんな目で見られるか、想像しなくても理解出来た。

アパートに戻ると、直ぐに私の採寸が始まった。身体を五つのパーツに分けて作り、

最終的に縫い合わせるのが最良だと、夕子は言った。

そして型紙が作られ、ヒーロー衣装は少しずつ全体像がわかるようになってきた。

第16話

そんな時、私の耳は悲鳴をキャッチした。その声は危機感迫るものだった。

弘子には言わなくても直ぐ分かる。私の心を読むからだ。コスチュームはまだない。

しかし、行かなくてはならなかった。

制作は夕子に任せ、私と弘子は悲鳴に向かって移動した。

「へー、本当に走るのが早いのね」

弘子は私の心を読んで、ある程度の能力は理解していたが、実際に見るのは初めてだった。

「そうかい？弘子みたいに飛びたいけどね」

私の答えを弘子が笑った。

「当たり前でしょ。私は実体がないの。だから重力の影響も受けないわ。」

飛んでいるように見えるけど、私自身は何もしてないのよ」

言われてみればその通りだった。弘子達幽霊は、魂のみの存在で、実体がない。

意志のみで行動できるのだ。弘子にしてみれば、私のように『さあ、飛べ』

と言わなくても、私についていくと考えただけで、行動できる。

これが、目的地がはつきりしている場合、瞬間移動となるのだ。

ただ、弘子には悲鳴は聞こえない。今は、私の後に続くしかないのだ。

それこそ従順な奥さんみたいに……。

また、変な発想をしてしまった。弘子をチラッと見たら、怒っていた。

でも、その目は優しく笑っていた。

そんな二人の高速デート？も、あっという間に終わった。悲鳴の現場に着いたのだ。

一軒の大きな屋敷だが、悲鳴はそこから聞こえていた。軽くジャンプして塀を越え、悲鳴の聞こえる窓を見た。

部屋の中央に男が立ちはだかり、赤ん坊を抱きかかえ、さらにナイフを向けていた。

赤ん坊のお母さんだろうか、必死に返してと泣き崩れていた。

「あの男、別れた亭主で、子供は彼の子よ」

弘子はすでに男の心を読んでいた。

「急いで、二人とも殺し、自分も死ぬ気だわ」

私は窓を突き破り、体当たりを食らわそうと考えた。

「待つて」

私の動きを止めるように弘子は叫んだ。なおも男の心を読んで要るようだ。

「躊躇しているわ。ちょっと見ていて」

そう言うのと弘子は姿を消した。私は窓から中を窺う事しか出来なかった。

弘子は何をするのだろう。

心配しながら見ていると、急に男が泣き崩れ、床にナイフを落としたりした。

「今よ」

弘子の声が聞こえると同時に、私は窓ガラスを蹴破り、部屋に入った。

そして、ナイフを遠くに放り投げて、赤ん坊を取り上げた。

男は私に構うことなくただ泣き崩れていた。赤ん坊を母親に返すと必死に抱きしめ、声に出して泣き何度も名前を叫んだ。おそらく子供の名前だろう。

「もう大丈夫。行きましょう」

いつの間にか弘子が隣にいた。

「大丈夫って……」

私は弘子の言葉に戸惑った。

「あの男、ほつといて良いのかい？」

「もう邪悪な心はないわ、私にはそれが分かる」

弘子の言うことならば信用できる。しかし、何故？急に……。

「聞きたい？」

弘子の前で考え事は無理だった。こちらの考えは全てお見通しなのだ。

「実はね、ちょっと赤ちゃんに憑依したの。そこでね、パパって呼んだらご覧のとおり」

男は、パパと呼ばれ殺す決心が鈍るところか、完全に失せたそうだ。初めてパパと呼んでくれた自分の子供を、簡単に殺すことなど出来るものではない。

そして自分の過ちに気がつき、更生することを心に決めたらしい。

「きつと良いパパになるわ。奥さんは許しそくに無いけど」

弘子は笑った。私も笑った。しかし、どちらがヒーローだか分からない。

良いコンビは間違いがないのだが……。弘子と私は色々な話をしながら歩いた。

久しぶりのデート？に気分は高揚し、妙に心が浮き立つ。

私以外に見えないと思うと、残念な気持ちになった。

まあ、自分がよければそれで満足すれば良いだけだ。

第17話

アパートに戻ると、客人？が増えていた。中には外人まで混ざっていた。

「もう、私は箸も持てないのよ」

夕子は私たちの顔を見るなり怒り出した。

「任せる、と言って二人とも居なくなるから……。仕方なく応援を呼んだわよ」

「ごめんね、夕子。実は、私もヒーローしちゃった」

夕子も弘子の話を聞いて嬉しそうだった。

「赤ちゃん良かったわね」

その場にいた幽霊全員が喜んだ。何故ならばと赤ちゃんの霊が一番可哀相なのだと、

弘子は説明してくれた。赤ちゃんが死ぬと、必ず幽霊になるそうだから成仏するために迎えに来たとき、何も選ぶことが出来ないためだ。結局はここに留まり、人間界のように世間を勉強してから、旅立てるようになるらしい。

しかし、人間の歳で言えば七歳までしか成長できず、その時成仏を選ばなければ、

ずっとこの世界に留まることになるそうだった。

これからは、赤ちゃんの危機を最優先にと、私は心に決めた。

「そうそう、この人有名だったのよ」

そう言っただけで夕子は一人の外人を私の前に連れ出した。

「待って、私、英語は苦手で……」

私の言葉は夕子に笑われた。いや、その場の全員に笑われた。

「実体がないと言ったでしょう。だから声もないのよ。会話と聞いているけど、

実際はテレパシーみたいなものよ。だから、英語も日本語も存在しないの」

弘子が分かり易く説明してくれた。笑いが収まると夕子は気を取り直して紹介した。

「この人ハリウッドで活躍していたのよ。映画の衣装関係で有名だったの。ジョンよ」

「はじめまして、ジョン」

ジョンは私の手を見て、更にくまなく舐めるように全身を見た。

「うーん、まったく分からん、見分けもつかない。本当にエイリアンか？」

私が困っていると、弘子が助けてくれた。

「私が保証するわ。今も一緒だったけど、走る速さは音速並みよ」

「生きている間は、色々な衣装を手がけてきた。もちろん、ヒーロー物やエイリアンまでね。しかし、実在するとは驚いた」

「いや、幽霊だって驚きますよ」

「確かに、私も死ぬまで信じなかったよ」

ジョンは大笑いした。そしてジョンに、なにか能力を見せてくれと言われた。

ジョンだけではない、その全員が見たがった。私は中でも自信のある口火術？を見せた。

私の命名だが、口から火の吐くあれである。

今ではかなり上達し、自在に操ることが出来る様になっていた。

「おー、それは幽霊にも出来ないな」

ジョンは笑った。みんな笑った。幽霊は陽気なのだなと思ったが、喜怒哀楽が激しいだけだった。制御する肉体が無いためだろう。

その証拠に初めて弘子を見たときは、背筋が凍りつくような形相だった。

全ては怒りからくるもので、怒りが収まれば、温和な顔だ。続いて見せた五十センチ飛行術は、みんなの興味を誘った。

何故、ぴたりと五十センチなのか、疑問に思ったようだ。

重力のせいではとの説もあったが、建物の側面を登ることが出来るとなれば、

重力説は覆される。飛び回るのは、幽霊の専売特許だ。意見の交換にも熱がこもっていた。

私が高く飛べるようにならないか、皆必死に考えてくれた。ところがいくら幽霊とは言え、私はエイリアンである。知らないことばかりだ。

地球の尺度で測ることは出来ない。

そこで私は、皆に情報カプセルを見てもらう事にした。私自身見るのは久しぶりだった。

部屋はちよつとした映画鑑賞会に変貌した。

中盤に差し掛かった頃、ジョンが一つの疑問を投げかけた。

消滅したとして、君たちには魂が残るの？である。

言われてみれば、今まで考えたことはなかった。

私自身、寿命かなにかで死んだ場合、弘子の言うように、迎えが来るのか？

幽霊になれるのか？私も疑問に思った。そこで私は皆に聞いてみた。「死後の世界はあるの？あるのならばどこに？」

これにはジョンが答えてくれた。

「今、居る所は人間界。分かるよね。そして我らが居るのはその狭間だ。」

人間界と霊界との隙間と考えてもらえれば結構だ。地球を人間界とすれば、

その外周にあるのが霊界だ。人間界を取り巻くように存在している。だから、国境も無ければ、言語の隔たりも無い。分かるかね」

「分かります。要は地球を取り巻いている訳ですね」

私は手で二重の輪を作った。

「そう思つて差し支えないだろう」

「では、その外側はどうなっていますか？」

「へっ」

私の質問にジョンは面食らった。

「私の故郷、他の星ですが、それはあなた方の世界のほうが近いの

ではないですか」

「うーん」

ジョンはうなった。全員が考え込んだのだ。ジョンの説明からすれば、人間界より、

霊界のほうが、外宇宙と明らかに近い。
それならば、人間界よりも情報は早く届くのではないかと思ったのだ。

その時一人の男が話し始めた。ラテックス工作の熟練者だと紹介された男だった。

「貴方の言うとおりですが、霊界の目は宇宙には向けられていません。

輪廻は理解できますか？その輪廻、次代の誕生に向けて地球を見ているだけです」

「では、見ようとすれば見られるのですか？宇宙を……」

「接触は許されていません。本当は人間界との接触も許されてないのです。

ただ、我々は狭間に居るから接触できるのです」

「何故、宇宙に目を向けないのですか？」

「種族の保護です。仮に、宇宙とつながりを持ち、同時に霊界同士がつながりを持ったら、

地球あるいは、接触を持った星に異星の魂が誕生する恐れが出てきます。

火星に生命体がいたとすれば、火星人の魂を持つ地球人が生まれてしまう恐れが

出るからです。種族の保護のためにも、霊界のつながりは決して出

来ないのです。
人間界が接触する分には問題ありません。その肉体は朽ち果てる運命だからです」

「私が死んだら、誰が迎えに来て、どこにいくのでしょうか」

単純な質問だが、私には重要なことだった。

「おそらく貴方の星から使者が来るはずです。しかし、星そのものが消滅した場合、

残念ですが、誰も来ません。霊界とは、それぞれの星に個別に存在するものなのです。

星が無くなれば、霊界もなくなります。そして、輪廻もそこで断ち切られるのです」

私にはショックが大きすぎた。いつまで生きられるか分からないにしろ、

私の死は、全ての終わりを意味していた。しかし、同時に小さな期待も胸に沸いてきた。

星さえ消滅していなければ、故郷に帰れる可能性があるのだ。

故郷の母の消滅の意味がはつきりと分からない以上、その望みに賭けるしかなかった。

弘子は優しく私に寄り添った。実体はないが、暖かさは感じられた。

「ありがとう」

その言葉が精いっぱいだった。でもそうならば、生きているうちに出来る限りのことをしてやろうと思った。もう迷ってはられない。そう心に誓った。

それからの作業は、急ピッチで進められた。出来上がり品もデッサン通りの出来栄で、

弘子も喜んでいた。一番喜んだのは、もちろんこの私だ。

晴れてヒーローになれると確信したのだ。

制作に参加してくれた客人は一人また一人と、本来いるべき所へ旅立っていった。

だが弘子一人は、私の生涯が閉じるまで、一緒にいると言ってくれた。

そのときが人生で一番幸せな時期だった。

最終話

私のヒーローネームは「ヒートマン」に決まった。

胸の（H）と、火を吐く能力から付けられたものだ。

しかも名づけ親は、いつかの嫌なニユースキャスターだった。

まあ、まともなネーミングを考えてくれた事には感謝したい。

数々の私の活躍は、皆には一人に見えただろうが、常に幽霊の弘子が寄り添い、

適度な助言を与えてくれたお陰だった。

弘子は、犯人の心を巧みに読み取り、次の行動を私に教えた。

その為、常に犯人よりも先に行動ができ、専制パンチを見舞うことができたのだ。

私たちはコンビだ。決して離れることの無い名コンビだ。

飛行術は相変わらず五十センチだが、思った以上に速さは増した。

例の客人たちが、必死に考え、航空力学の教授まで連れてきて出した答えが、

今のコスチュームに活かされていた。

空気抵抗を二次動力として活用できる装置を考えついたのだ。

何度も説明は受けたが、頭が良いはずの私には理解できなかった。

お陰で今では最高時速百キロは余裕だ。ただしよほどのことが無い限り、徐行飛行に勤めた。

何せ五十センチのため、速度を出すと電信柱にぶつかったり、

郵便ポストに激突したりと散々な目に遭ったからだ。

もしも、小さな子供に激突したら、と思うと、おのずと速度は抑えられた。

今では、四六時中、街を巡回している。

弘子が毎月ある程度のお金を、確実に持ってくるからだ。

仕事に追われずヒーローに専念できたのも、全て弘子のお陰だった。もしもあの時、弘子と出会わなかったら、と思うと全身が凍りつく

ような不安が襲いかかる。そんな弘子と一度だけ、キスを交わしたことがあった。私のたつての願いだったが、

もちろん幽霊とはキスはできない。人間に弘子が乗り移り、キスを交わしたのだ。

しかし、弘子の体力はかなり消耗するようだ。体力と言っても体は無いが……。

それ以来、無理強いはしていない。心が繋がっていれば、それで十分だった。

日本国内の犯罪は激減した。特に子供が巻き込まれるような事件は、優先的に対処したため、

今ではないと言っても良かった。殺人も殆ど無くなり、たまに窃盗事件が起こる程度だった。もうあれから十年以上が経とうとしていた。

私の肉体はほぼ完成したようだ。歳も取らなくなり、充実した日々を送っていた。

本来ならばもう直ぐ六十だが、初めてコスチュームをつけた日から老けなくなった。

かえって若返ったかも知れない。今日も弘子が寄り添い、街に出かけた。

「ごころうさま」

道行く人が挨拶をくれる。小さな女の子が手を振ってくれる。警官も私に敬礼をしてくれる。

地上五十センチで徐行飛行の私に。私は皆から元気をもらっていたのだ。

皆の笑顔が私の支えだった。もちろん弘子の支えが無ければ、私の存在すらなかったと同じだ。弘子もそんな皆を笑顔で見ていた。ヒーローデビューは遅かったが、私は満足した日を過ごしていた。

確かに苦労はしたものの、それに見合う結果を出せたのだ。

ある日、いつかの中学生が私の元を訪れた。誘拐事件を解決した時だった。

丁度、警官に犯人を引き渡したときに、私の前に歩みだしたのだ
た。

すでに立派な若者に成長していたが、面影は残り、私は直ぐに気が
付いた。

彼はじつと私を見た後、『誰にも言わなかったよ』と、耳打ちした
のだ。そして

『これからも頑張つて』と言い残し、成長した中学生は去つていっ
た。

私は涙が出そうになるのを、必死で抑えた。皆に好かれているとの
実感に心が震えたのだ。

そんなある日、オフィス街のビルで火災が起きた。

私の耳は警察無線や救急無線にも敏感に反応できた。

弘子は何も言わずに頷くだけで。それは『さあ、いきましょー』
そんな気持ちなのかも知れない。

現場にはすでも三台のはしご車が到着していたが、なにせ高いビル。
火元の階にも消火が届かないのだ。

発生場所は二十七階あたりだろうか、窓からモクモクと煙が立ち登
っていた。

どうやらスプリンクラーでは歯が立たないらしい。

やがてガラスの破片が飛び散り、路上に降り注いだ。そして悲鳴…
…。

女性が窓から身を投げた。熱さと煙で逃げ場を失い、死へのジャン
プをしたようだ。

五十センチ飛行術の本領発揮だ。わたしの行動は早かった。

空中で女性を捕まえ、くるりと反転すると、あっという間に地上に
降り立った。

周囲からは歓声が沸き起こったが、それどころではなかった。次々
に人が落ち始めたのだ。

おそらくビル内部は、高温地獄と化しているのだろう。

私は弘子の誘導に従い、順番に落ちる人々をキャッチした。何往復

しただろうか。

弘子が頷いた。もう、落ちる心配は無いと言う合図だ。必死に水圧を上げて消火活動をするはしご車を、私は届く距離まで持ち上げた。

幸いホースの長さは十分にあつたからだ。

やがて、煙も落ち着き始め、私ははしご車を戻して外壁にそつて上昇した。

割れた窓ガラスから中に進入すると、まだ、所々火は残っていたが、延焼の危険はなくなつたようだ。消防官も内部での消火を続けていたためだろう。

死者は一人も居なかつた。

私と弘子は満足な気分ですの場を立ち去つたが、突如として私の身体が異常を示し始めた。かなり無理をしたとも思つたが、私は身体は疲れとは程遠い症状だつた。

何も聞こえないのだ。弘子の声は聞こえるが、耳を澄まして、話声さえ聞こえない。

やがて目の前が真っ暗になつた。急に電気を消されたように、完全な闇が私を支配したのだ。私は恐怖した。弘子が異変に気がついたが、姿が見えない。やがて身体が麻痺しだした。

手の自由も、足の自由も奪われ、私は声さえも失つた。寿命が来らしい。

咄嗟のそつ思つたが、急激過ぎた。心の準備が出来ていないのである。

地球人のように、徐々に弱っていくのとは違い、突然に襲われたのだ。

私は薄れ行く意識の中、必死に弘子と呼んでいた。私はその時思つた。

私の故郷は完全に消滅していたのだと。

しかし、弘子の暖かさは、私の意識がなくなるまで感じる事が出来た。

約束通り、私の生涯が閉じるまで、そばにいてくれるつもりらしい。弘子、愛しい弘子。今までありがとう。弘子の返事が聞こえた気がした。

しかし、直ぐに暗黒が私を包み込んだ。そして後に残ったのは無の世界だけだった。

最終話（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。
もう、お気づきの読者もいると思いますが、

「怨情」の登場人物とリンクしており、アパートも同じです。そんな理由からも、外伝的な気持ちで書いてみました。コメント、評価頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9347d/>

遅い目覚め

2010年10月10日00時06分発行